

## 平成23年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター  
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

### 今後の見通し（平成23年11月～平成24年3月）のポイント

#### 海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「平年並み～やや高め」で経過するが、大陸棚上、沖縄島周辺海域、黒潮域では後半に「やや低め～平年並み」となる。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

#### 漁況（来遊水準）

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を上回る。
- (5) ウルメイワシは前年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年並み。

※「前年」は平成22年11月～平成23年3月。

### 問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、内海

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

担当：皆川、阿部

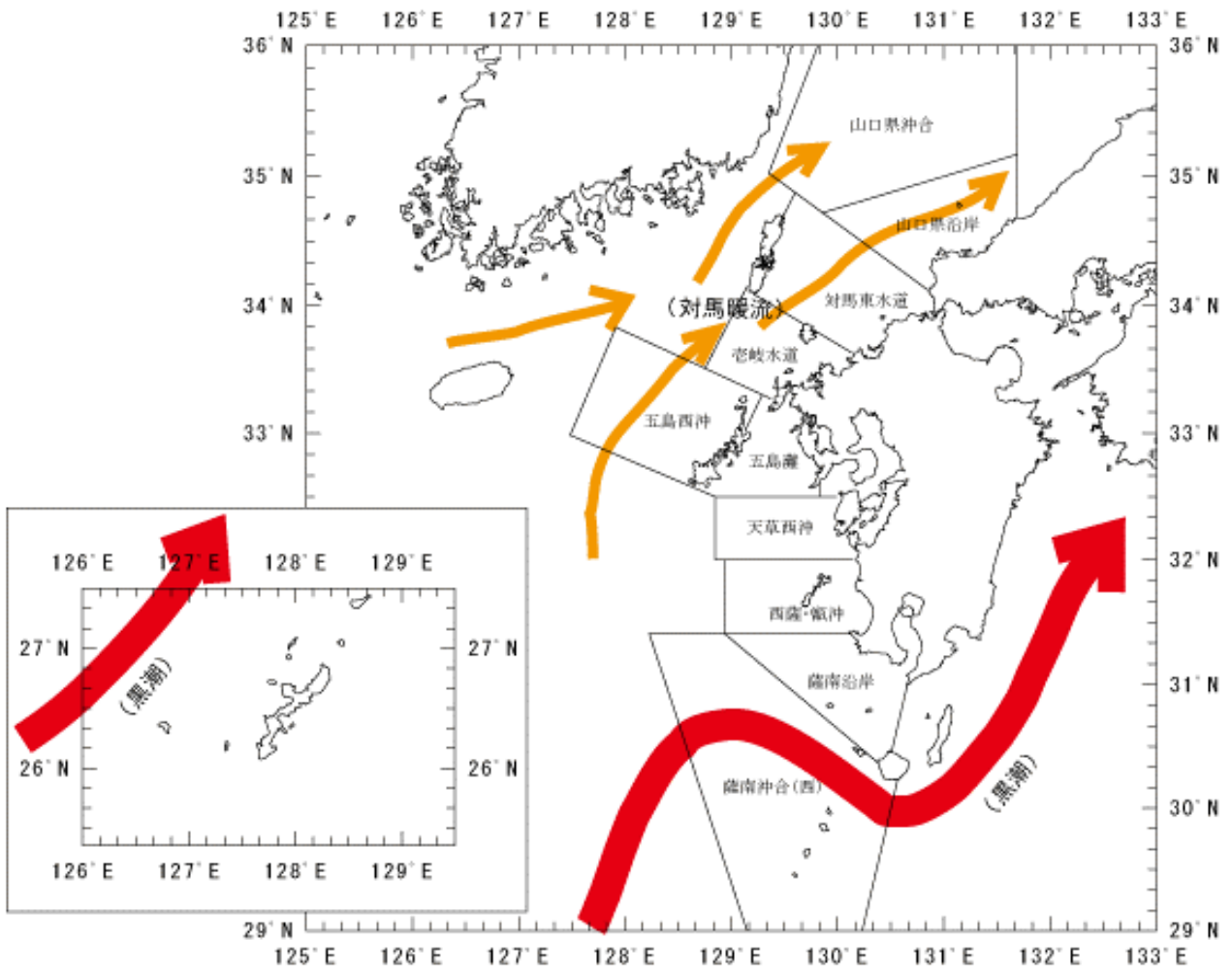
電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

# 予報対象海域



# 西海ブロック海況予報

## 1. 今後の見通し (2011年11月～2012年3月)

### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

### (2) 表層水温

山口県沿岸・沖合で「やや高め」、対馬東水道、壱岐水道で「平年並み～やや高め」、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸で「平年並み」、大陸棚上、沖縄島周辺海域、黒潮域で、前半は「平年並み～やや高め」、後半は「やや低め～平年並み」で経過する。

## 2. 経過 (2011年4～10月)

### 1. 大陸棚上

#### (1) 海面水温

北部：4月「はなはだ低め」、5月「かなり低め」、6月「やや低め」、7月「平年並み」、8月「やや低め」、9月「やや高め」。

南部：4月「はなはだ低め」、5月「かなり低め」、6～8月「平年並み」、9月「やや高め」。

### 2. 黒潮流域

#### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、6・8月は「離岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

#### (2) 海面水温

4月「はなはだ低め」、5月「かなり低め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8・9月「平年並み」。

### 3. 沿岸域

#### (1) 表層水温

山口県沖合：4・5月「平年並み」、6月「かなり低め」、7月「やや高め」、8・9月「平年並み」、10月「やや高め」。

山口県沿岸：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「やや低め」、7月「かなり高め」、8～10月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「かなり低め」、7～10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「やや高め」。

五島西沖：4・6月「やや低め」、8月「平年並み」。

五島灘：4月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

西薩・甌沖：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5月「やや低め」、8月「平年並み」。

薩南沖合：4・5月「やや低め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東：4～7月「平年並み」、8月「はなはだ低め」、9月「平年並み」、10月「やや低め」。

#### (2) 表層塩分

山口県沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「かなり低め」、8～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4～8月「平年並み」、9月「やや高め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4～8月「平年並み」、9・10月「やや高め」。

壱岐水道：4月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。

五島西沖：4・6・8月「平年並み」。

五島灘：4・6・8月「平年並み」。

天草西沖：4・5・8月「平年並み」。

西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「平年並み」、7月「かなり高め」、  
8月「平年並み」、9・10月「かなり高め」。

### 3. 現況（2011年10月上旬）

#### （1）大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「平年並み」。

#### （2）黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「平年並み」。

#### （3）対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

（註）引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

## 東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2011年11月～2012年3月）

対象海域 : 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業 : まき網、定置網、その他

対象魚群 : 0歳魚（2011年級群（2011年生まれ））、1歳魚（2010年級群）、2歳魚（2009年級群）。  
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

### 1. マアジ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

### 2. マサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

### 3. ゴマサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3) 魚体 : 25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および32～36cmの2歳魚（中銘柄）が主に漁獲される。

### 4. マイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 15～19cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

### 5. ウルメイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 15～23cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

### 6. カタクチイワシ

(1) 来遊量 : 前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体 : 10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2010年11月～2011年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。  
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

## 漁況の経過(2011年4月～8月)および見通しについての説明

### 1. 資源状態

#### (1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005～2007年の加入量水準は近年では低い水準となり、2008年にかけて資源量は減少したが、2008年以降には加入量は増加したとみられ、資源量もやや増加した。

東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005～2007年は減少した。2006年以降は減少して13万トン前後で推移し、2010年は12万9千トンであった。

#### (2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量のため、資源量は2008年に急激に増加し、2009年も2008年と同程度の値を示したが、2010年の資源量は2009年よりやや減少した。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年に41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は9万トン前後で推移していたが、2007年は10万6千トン、2008年は12万1千トン、2009年は13万1千トンと緩やかな増加傾向を示した。2010年は2009年よりもやや減少し、11万8千トンであった。

#### (3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2009年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示した。その後、資源量は2008年にかけて減少傾向を示したが、2009年以降は緩やかな増加傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の8万8千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は3万1千トンであった。2005年は7万6千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2010年は2万9千トンであった。

#### (4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、2007年の漁獲量は1万4千トンと近年では最も多かった。2010年の漁獲量は6千トンであった。

### (5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。近年では、1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあり、2001～2007年には資源量がやや増加し、2008年は再び減少したものの2009・2010年は増加した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加に転じ、2009年の漁獲量は2万3千トン、2010年の漁獲量は2万9千トンであった。

### (6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1997～1999年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。しかしながら資源量は2000年から2004年まで一旦減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008・2009年に減少し、2010年は2009年と同水準であった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年には12万トン以上となった。2001・2002年は漁獲量が一旦下がったものの、その後は再び増加し、2008年には9万7千トンとなったが2009年は5万1千トンと減少し、2010年は6万5千トンであった。

## 2. 漁況の経過

2011年4月～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖および東シナ海南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計5万4千トンで前年(2010年4月～8月、3万8千トン)を上回った。マアジは2万8千トンで前年(2万4千トン)並みで、さば類は9千トンで前年(6千トン)を上回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、佐賀県では前年を上回り、山口県は前年並み、その他の海域では前年を下回り、全体としては前年・平年を下回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年・平年を下回った。漁獲の主体は27～32cmの1歳魚と26cm以下の0歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は31～36cmの2歳魚と27cm以下の0歳魚であった。マイワシは、前年・平年を大きく上回った。漁獲の主体は15～17cmの1歳魚であった。ウルメイワシは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は4・5月が15～25cmの1・2歳魚で、6月～8月は5～17cmの0歳魚であった。カタクチイワシは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は4・5月が8～11cmの1歳魚で、6月～8月は2～7cmの0歳魚であった。

## 3. 今後の見通しの説明

### (1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2010年級群は2009年級群を上回る豊度と考えられる。2011年級群については、2011年4月に東シナ海で行った稚魚分布調査では前年を上回ったが、6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査、5・6月に東シナ海陸棚縁辺域で行った着底トロール調査、8・9月に九州西岸～対馬海峡で行った計量魚群探知機による調査では前年を下回り、2011年級群は2010年級群を下回る豊度と考えられた。これらから、0歳魚(2011年級群)は前年を下回り、1歳魚(2010年級群)は前年を上回り、2歳魚(2009年級群)は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当たり漁獲量)(参考図参照)は、2006年から2008年にかけて減少したが、2009年以降は増加している。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2007

年以降、同水準を維持している(参考図参照)。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、0歳魚が漁獲の主体となる沿岸域の漁況は前年・平年を下回ると考えられる。

#### (2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。2009年級群の豊度は2008年級群より低く、2010年級群の豊度は2009年級群より低いとみられる。2011年級群の評価は難しいが、5・6月に東シナ海陸棚縁辺域で行われた着底トロールの調査結果および漁況の経過から2010年級群より高い豊度とみられる。これらから、0歳魚(2011年級群)は前年を上回るものの、1歳魚(2010年級群)は前年を下回り、2歳魚(2009年級群)は前年を下回ることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年・平年を下回ると考えられる。

#### (3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では1月～3月期には2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2009年級群の豊度は2008年級群と同程度、2010年級群の豊度は2009年級群と同程度とみられる。2011年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2010年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0歳魚(2011年級群)は前年並み、1歳魚(2010年級群)は前年並み、2歳魚(2009年級群)は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、0歳魚(2011年級群)および2歳魚(2009年級群)が漁獲の主体となり、前年・平年を上回ると考えられる。

#### (4) マイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。これまでの漁況の経過より、2010年級群の豊度は2009年級群より高く、またそれ以前の年級群と比較しても過去5年間では最大の豊度であると考えられる。2011年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2010年級群と同程度の豊度であると考えられる。以上より、全体の来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

#### (5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。各県の4月～8月の漁況からみると2011年級群の豊度は2010年級群を上回り、2010年級群の豊度は2009年級群と同程度か上回ると考えられる。全体として来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

#### (6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚秋季発生群(小羽銘柄)と、0歳魚春季発生群(大羽銘柄)および1歳魚(大羽銘柄)が漁獲の主体となる。春季発生群でみると2011年級群の豊度は2010年級群並みで、2009年級群を上回ると考えられる。秋季発生群の2011年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2010年級群と同程度と考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。



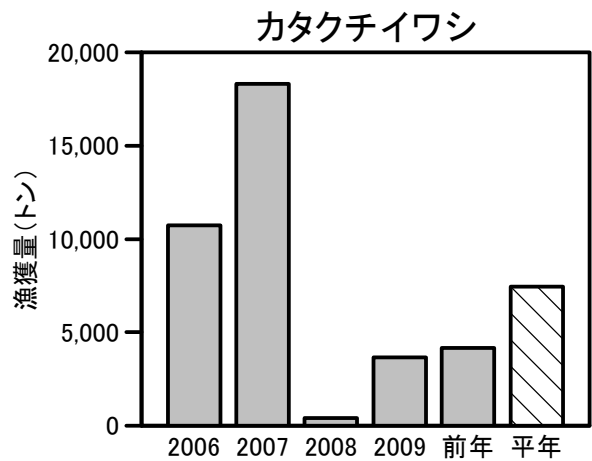
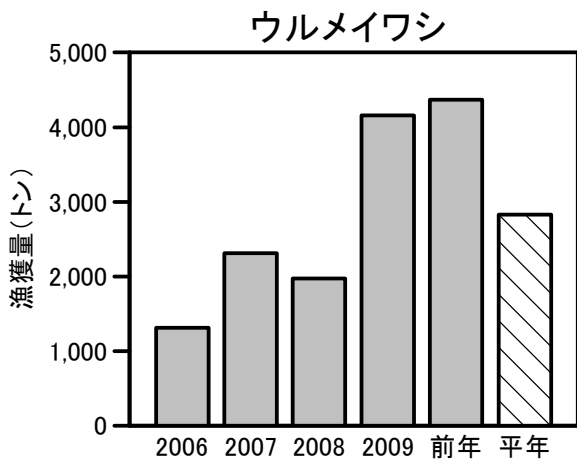
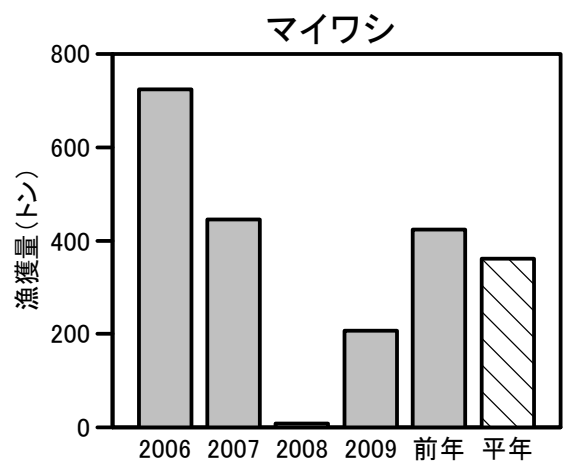
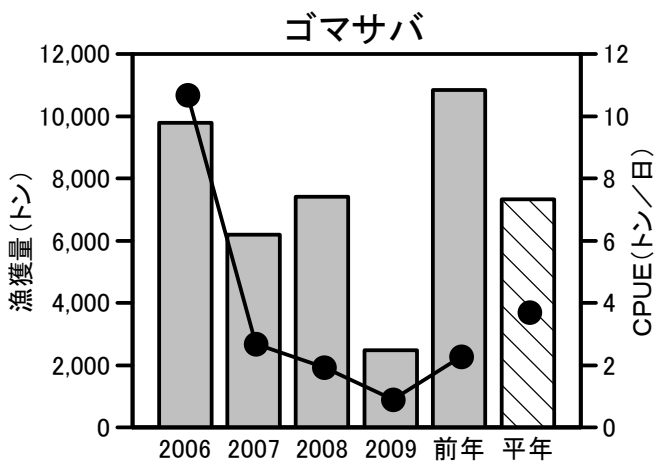
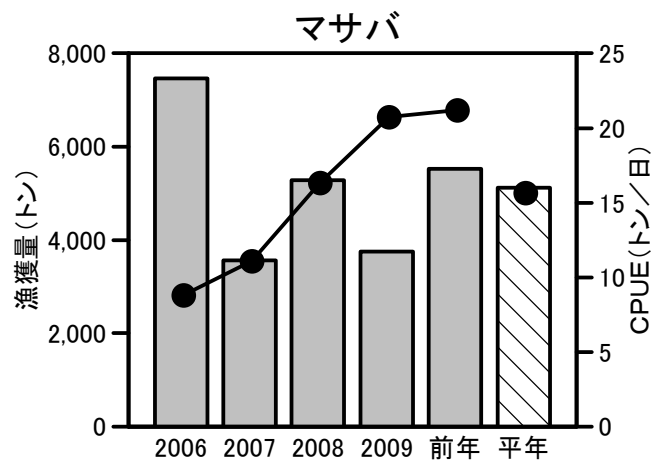
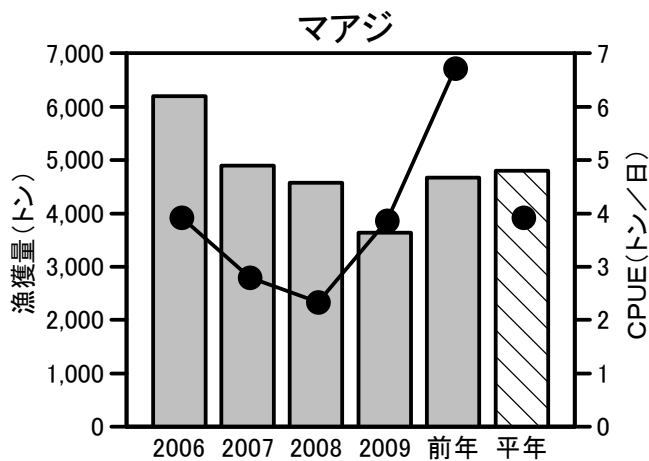
表1. 沿岸域の漁況経過(2011年4月～8月)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網の水揚量は1597トンで前年・平年並みであった(前年比95%、平年比86%)。	中型まき網の水揚量は当歳魚主体の726トンで前年・平年を上回った(前年比165%、平年比141%)。	
福岡	代表港まき網の水揚量は434トンで、前年・平年を下回った(前年比51%、平年比62%)。また0歳魚の平年比は56%、1歳魚の平年比は93%であった。棒受網の水揚量は10トンで、前年並みで、平年を下回った(前年比100%、平年比14%)。	代表港まき網の水揚量268トンで、前年を上回り、平年並みだった(前年比161%、平年比103%)。ギリ銘柄が主体であった。棒受網の水揚量1トンで平年を上回った(平年比125%)。	代表港まき網の水揚量は13トンで、ほとんど漁獲のなかった前年を上回ったが、平年を下回った(前年比724%、平年比24%)。
佐賀	前年同期を上回り、平年同期並みだった(前年比124%、平年比92%)。	前年同期を上回り、平年同期を大幅に下回った(前年比276%、平年比19%)。	
長崎	地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った(前年比43%、平年比45%)。	地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った(前年比43%、平年比45%)。	
熊本 牛深港	水揚量は34トンで前年(98トン)・平年(127トン)を下回った(前年比35%、平年比27%)。	水揚量は135トンで前年(697トン)・平年(395トン)を下回った(前年比19%、平年比34%)。	
鹿児島	主要4港のまき網では、小アジ(2010年級群)、アジ仔(2011年級群)主体で、豆アジ(2010年級群)、中アジ(2009年級群以上)混じりの漁獲があった。4月は好調な漁模様であったが、5月以降はアジ仔の加入が非常に悪く低調に推移した。期間中合計で599トンの水揚げで、前年(1046トン)・平年(1199トン)を下回った(前年比57%、平年比50%)。		主要4港のまき網では、4月以降、ゴマサバ中小(2009年級群)主体に好調に推移し、5月以降は、ゴマサバ豆(2011年級群)も漁獲された。特に7月～8月は3～4千トンと夏場としては異例の高水準となった。期間中合計で14545トンの水揚げで、前年(5746トン)・平年(7282トン)を上回った(前年比253%、平年比200%)。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網の水揚量は7トンで前年を上回り、平年を下回った(前年比328%、平年比58%)。湊地区の浮敷網では、まとまって漁獲されなかった。	湊地区の浮敷網の水揚量は29トンで前年・平年を下回った(前年比14%、平年比26%)。	湊地区の浮敷網の水揚量は小中羽主体に1141トンで前年・平年並みであった(前年比96%、平年比80%)。
福岡	代表港まき網の水揚量は27トンで前年並みで平年を下回った(前年比115%、平年比33%)。棒受網の水揚量は9トンで、前年・平年を下回った(前年比57%、平年比21%)。	代表港まき網の水揚量は10トンで前年・平年を下回った(前年比14%、平年比6%)。棒受網の水揚量は20トンで、平年を上回った(平年比233%)。	代表港まき網の水揚量は4トンで、前年・平年を上回った(前年比219%、平年比789%)。棒受網の水揚量は55トンで前年・平年を下回った(前年比74%、平年比62%)。
佐賀	前年同期を大幅に上回り、平年同期を下回った(前年比16213%、平年比29%)。	前年・平年同期を大きく下回った(前年比19%、前年比1%)。	前年・平年同期並みだった(前年比84%、平年比84%)。
長崎	前年・平年を大きく上回った(前年比1729%、平年比1188%)。	前年・平年を上回った(前年比292%、平年比150%)。	地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を下回った(前年比103%、平年比75%)。
熊本 牛深港	水揚量は1666トンで前年(13トン)・平年(65トン)を上回った(前年比13242%、平年比2567%)。	水揚量は513トンで前年(717トン)を下回り、平年(442トン)並みであった(前年比72%、平年比116%)。	水揚量は1868トンで前年(1636トン)並みで、平年(1364トン)を上回った(前年比114%、平年比137%)。
鹿児島	主要4港のまき網では、4・5月に中羽(2010年級群)主体、6月～8月は小羽(2011年級群)主体に甌島周辺海域で好調な来遊となった。期間合計で、2265トンの水揚げで、前年(5トン)、平年(380トン)を大きく上回った(前年比44095%、平年比596%)。北薩海域の棒受網では、5月から小羽(2011年級群)が好調に来遊し、期間合計で460トンの水揚げで前年(62トン)、平年(27トン)を大きく上回った(前年比737%、平年比1676%)。	主要4港のまき網では、4月～6月は中・大羽(2010年級群)主体、7・8月は小羽(2011年級群)主体に好調な来遊となった。期間中合計で、1533トンの水揚げで、前年(1020トン)・平年(1241トン)を上回った(前年比150%、平年比124%)。北薩海域の棒受網でも7月から小羽主体に好調な来遊となった。期間中合計で、1078トンの水揚げで、前年(844トン)、平年(775トン)を上回った(前年比128%、平年比139%)。	主要4港のまき網では、大羽(2010年級群)主体に、水揚げは1016トンと前年平年並みであった(前年比83%、平年比115%)。北薩海域の棒受網では、中・大羽(2010年級群)主体で、水揚げは488トンと、前年・平年並みであった(前年比105%、平年比110%)。

注：「前年」は2010年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。



#### 今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

## 参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ)
熊本県水産研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	